

昭和46年度
(1971)
第11回大会

男子優勝 札幌南

女子優勝 札幌静修

【 専門委員長 寸評 】

札幌・小樽各支部のご協力を得て、従来よりは規模は小さいが、充実した全道大会をもつことができ、慶びにたえない。

特に本大会で目立った点は

- (1) 男子単では準々決勝以後の試合では非常に充実したプレーで、この8人のうち誰が全国大会に出ても不足はないものと感じられた。
- (2) 女子では3年生ですぐれたプレーヤーが例年より少なく、基本を大切にしたプレーで入賞した2年生が目についた。今後を期待したい。
- (3) 特に目に付いたのは地方勢の退潮であった。札幌勢が特に強くなったとも思われないので、今後の奮起を期待したい。

【全国大会】

男子団体戦で本年も3回戦に進むことができ、例年通りというところで、北海道の男子の力は全国で中位のところに安定してきたようである。今後はベスト8入りを目指して努力したいものである。

男子単では、今井、小島が3回戦に進み立派であった。健闘を讃えよう。

女子については団体戦でもう一息というところで勝ちをのがしてしまったのは残念であった。全国的レベルで男子ほど力がついておらず、早く1回戦を勝ちたいものである。今後を大いに期待したい。

(専門委員長 鳴海 幸男)

優勝のよろこび

男子 札幌南高等学校

今大会は、いつもとは違って予選を勝ち進まねばならなかった。予選は6月6、7日に行われたが、南校は幸いにして本大会に第1シードで出場できることとなった。

本大会は6月19～22日まで円山で開催された。すでに6校に絞られていた。19日、その日は真夏を思わせる絶好の天気であった。札南のメンバーも、去年札西に決勝で敗れているだけに、今年こそはと、最初からかなり張り切っている。決勝は2時頃から、やはり札西と戦うことになった。シングルス2組、ダブルス1組が同時に3つのコートに入った。自分は、第2コート。トスで開始されたが、何だか調子がおかしいと思っている間に、3ゲーム連続して落としてしまった。隣を見ると、シングルスは大丈夫なようではあるが、ダブルスがかなり苦戦している。自分はようやく0 - 3から3 - 5、5 - 5にまでこぎつけたあと、気持ちが静まってきたので、第1セットの後は比較的楽に取ることができた。

ダブルスも10 - 10から、田中と小島の息があって、12 - 10で第1セットを取り、第2セットもその調子で押し切った。シングルスの石見は、主将としての重責を見事に果たしてくれた。

この結果、優勝カップを手に入れることができたが、練習の成果を優勝という形に表すことができ非常に運が良かったとおもっている。だが、この優勝は当然、団体戦の6人のメンバーだけで勝ち取れたわけではない。顧問の先生やコートを使用させていただいた札幌庭球協会の方々にも厚く礼を言わねばならないし、また、この栄光の陰で一生懸命に球拾いをした1年生や、春に突然の肩の故障で出場をあきらめた清水君のことも忘れてはならない。

最後に我が南校テニスクラブ員は、この優勝だけに満足せず、自己との戦いなのだと言いつつ聞かせながら、毎日練習に励んでいる。

(札幌南高校 今井 貞)

優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

私達の学校には、テニスコートがなく、市営のテニスコートを借りて練習をしてきました。それだけに一人一人の練習不足を感じ、短い時間でも充実した時間をとみんなで励ましあってきたのです。

またコートの使用のできない冬は、基礎体力を養い、素振りを何回となくやり、ストロークが安定するように努めました。

ですから、この優勝は私達にとってたとえようもない喜びであり、言葉で言い表すことができないものです。そして、明日への力を湧き立たせてくれるものです。この力は、困難にぶつかった時に私達を支えてくれました。この力によって、今後も様々な困難を乗り越えることができるでしょう。

この優勝は決して満足すべきものではありませんでした。けれどもこの優勝によって、私達は硬式庭球をやる一員として、いろいろなものを教えられたように思います。

これから私達が成長してゆく上で大きな財産になるでしょう。

(札幌静修高校 新免 幸子)

全国高校総体（第61回全国高等学校庭球選手権大会） 愛媛

8月2日～9日 愛媛県営道後テニスコート 愛媛大学テニスコート
松山商科大学テニスコート

女子 個人戦シングルス 優勝 佐藤 直子（学習院女子）